

---

# 占夢者人の夢～弐ノ巻・後編～

星河 翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

占夢者人の夢〜式ノ巻・後編〜

### 【Nコード】

N6477D

### 【作者名】

星河 翼

### 【あらすじ】

雅樹の賭けにに応じてしまった朔夜。雅樹が残した奇妙な暗号『F』  
『KN』24』と、『天使は全て知っている』のこの二つの言葉。  
陰陽師、叶の事故の下、朔夜がこの謎に挑む。悪夢と、雅樹の介入。  
そして、新たな真実は？ネットから始まる、全ての事実がここで  
明らかに！

全てが謎に包まれたまま、今の都住朔夜を支配していたのはこれからの身の振り方であった。

先程迄の事を振り返り何をすべきなのか……まず反省すべき点は茫然とした朔夜の判断が堵けを承諾してしまったと云う事である。

今更ながらに何故何も云い返せなかったのか？これから始まる、雅樹との賭け。

しかしだからといって事件が引き起こされる事になる訳にいかない。それが、雅樹にとって何を目的しているかは図り知れないが……

ただどこれこそが最優先しなければならないと理解した時、この後直ぐさま行動に出た事は図らずしも間違っていないと、そう納得できた。

朔夜は臃げながらも思い出せる事を思い返していた。

キーワードは、『天使は全てを知っている』

これは、自殺と、自殺未遂の現場に残されていた言葉である事は今迄の情報で分かってはいるものの、それ以外の共通する項目は皆無。

そして、云い残された『F || K N || 2 4』これらの二つの言葉だけである。

ここから導き出される答えは一体何であろうか？全く思い当たる点は何一つない。全くのゼロからのスタートなのである。そして、今日を含め三日間。朔夜が勝ると云う見込みは今の所全くゼロに等しかった。

「……何やて？」

叶は、興味深く朔夜の言葉を聴いていたが、一度確かめるかのようにならうにそう言った。

「今話した事が、全てですよ」

今の時点の朔夜は、結局一人で考えていてもどうにも前に進まないと考え、眠りに就いていた叶を叩き起こそうと想い病室に戻った所、既に目を醒ました叶がベッドであくびをしていた矢先であった。そこで、朔夜はありのままの事情を話したのである。

「まさか……あのマサキがかあ……うん。念の入った女装。恐るべしや……そつちでもいける口か？」

冗談はさておき、想い当たる事など何一つなく、接した事がほとんどと云って無い事は、敵を知らないのと同じと判断すべきであった。

「やけど、今回の全ての事件が陰陽師絡みとなれば、これは俺も参加せん事には拉致あかなあ」

叶は、左手で顎を掴むかのような仕種で考え事をしていた。

「真の陰陽師は、式神や呪術の類いが使えるし、俺には出来んが、夢さえも操る事ができるつてのが相場や……朔夜、お前だけでこれを解決するつちゆうのは無謀やわ」

確かに、叶の力は必要不可欠になって来ていた。

「そこで、叶には遠隔調査をしてもらいたいですよ」

こうして、簡単に叶に頼みたい事柄を朔夜の口から述べる事になる。

それを聴き、事の次第を受け止めると、

「なるほどな……敵さんは、下北沢を中心に事件を起してとる。そこで俺が、その下北沢に式神を放ち、事の次第を少しでも把握するちゆうこつちやな……分かったわ。それなら、その鞆取つてな」

叶は、朔夜から渡されたその鞆の中からいつも持ち運んでいる自らの式神の札を摘み上げると、自由の効く足でベッドを離れた。

「琴音！今から、下北沢のに護衛につけ！」

窓を開け、解き放つと、1羽の白い鳩となり羽ばたいていく。琴音は、叶が一番大切にしている式神である。でも、朔夜には只の鳩にしか見えないのだが。

「まあ、後は敵さんが下北沢に結界を張って無い事を祈るしか無いわ……しかし、呪術を使うとなると、それなりの覚悟がなきゃ、逆風を食らう事になる。向こうさんもそこんとこ分かってやっとする節もあるやろし……天に祈るしかなかる？」

「逆風……ですか？」

「そう。術つちゆうもんは、かけた当事者に跳ね返ってくるもんなんや……やから、それぞれ陰陽師と云うもんは、それに対しての対策を考えとるもんや」

「叶もですか？」

「当然やろ。でも、それが何かと云うのは、例え朔夜であっても教えられんわな……」

術者にとつて、命に関わる事。だからそれがなんであるのかは、たとえ近しきものであっても口外する訳には行かないのである。

「後は、妙ちきりんな暗号やな……」

『FKN24』

そこで朔夜の手帳に今書き込まれた文字の羅列を見ながら考えに入る。

「住所の暗号か何かか？ほら！住宅地図とかにこつこつこの書いてあるやん？」

叶は、テンション高く話しを進める。こつこつという探偵気取りな所が子供じみて笑える。

「あり得そうですが、そう云う事では無いように想えるのですよ。」

まん中のKNがポイントですね」

地図案内に二つ記号が連なる事は無い。

「三つ記号か……あり大抵にいくと、イニシャルが妥当やなあ」

雅樹が云う、ハンデと云う名のもとに、ヒントと目されたそれは、非情に簡単なものであるのかも知れない。

「イニシャル……あり得ますね。しかし、KNなんてイニシャルの人が下此沢に一体どれだけいるのでしょうか……？」

気が遠くなるほどの人数であろう。それに、調べるにしても、電

話帳や住宅地図をあてにする事も出来やしない。とにかく東京の人の入れ代わりは激しい。

「ならFと24は？何かの付け加えとちゃうか？」

「付け加えですか……」

「24……番地か？」

依然として、住所にこだわる叶。

「……24……いえ、年齢かもしれませんね？」

ふと、朔夜の頭を過ぎる数字。確か、神楽は24歳では無かったか？そこで、ハツと気がついた。

「これは、神楽さんを守るのか？という事なのかも知れません……いや、実際、神楽さんと云う訳では無く、標的を同じ女性に見立てて僕を試しているのかも知れませんよ……」

姉、神楽との事も大目に見てやる

突如、あの時云った雅樹の一言が気に掛かった。

結局は、雅樹の神楽に対する何かがそうさせているのかも知れない？

「どういつこつちゃ？」

独り納得している朔夜の表情を不思議そうに見ていた叶であったが、

「叶、判かりましたよ。このFはFEMININE。つまり、女性の……と言っ略語なんですよ」

何が気に食わなくて、事件まで起し、朔夜にこんな賭けを持ち掛けたかは判らないが、女性のイニシャルKNで、24歳をターゲットにしていると云う事なのだと理解した。これで少し絞る事が出来た気がした。

後は、『天使は全て知っている』という言葉のみである。

「何か拍子抜けしたなあ〜あっさり解いちまうなんて……」

叶にしてみれば、莫迦にされている感がある。こうやって解いて

みれば子供でも解けそうな暗号であった。

「ハンデと云っただけに、思い返してみれば簡単なのが当たり前なのですよ。しかし、下北沢の住人を調べるのは一苦勞ですね……ネットを利用してみるしか方法が有りませんよ」

すると、

「不当アクセスでもするつもりかいな……」

「こつこつという時、利用出来るものはとことん利用してみるのも良しとしませんか？」

つまりは、ネットで不当にアクセスしてハッカーとなり、個人情報報を保持している企業から住所録を調べあげると云う事である。こんな事は、法律上に問題が有る事は知っている。

「はいはい、つくづく敵に回したく無い奴やなあ〜でも気張りいや？あてが有るだけみつけもんなんやさかい。式神の方も結界が有る訳で無く取り敢えず琴音も無事下北沢に入れたようやから安心せえや？」

今入った情報だとも云うかのように叶は朔夜には見えない遠くの方を見据えて云った。きつと叶にはその状況を透視できるのである。

「そうですね。では、また何かあったら連絡しますよ。実際、自由に叶が動けるのであれば、もっと効率良く事が進むのですがね？」  
そういうと、朔夜は椅子から立ち上り軽く手を振って病室から立ち去ったのである。

「この三日間は、寝る事も出来ませんね……」

朔夜は覚悟を決めたかのように独り言を云いながら病院を後にした。

#1 FINKN24 (後書き)

式ノ巻・後編始動です。

ミステリーから始まり、サスペンスから、ちょっとだけオカルト。と云った感じです。宜しければ最後までお付き合い頂けると嬉しいです。



## #2 天使

天使

自宅に戻った朔夜は、早速時期外れの万年コタツに座り込むと、  
とるものもとらずネットに集中した。

慣れた手付きで不当アクセスし、進入したあらゆる企業の情報から、この下北沢に住む二十四歳女性のイニシャルKNにあたるものを全て余す事なくピックアップする。

そして、その情報をプリントアウトしてファイリングして行った。しかし、それでも五十件近くのリストが有り、どれが雅樹の云うターゲットになるのか、全く予測がつかなかった。

「これでは、どうしようも有りませんね……」  
五十件全てに対してなど、たった一つの身に対して接する機会など無い。ましてや、働いている女性だって数知れない。

「何か良い方法は無いですかね……」  
暫く考えていた朔夜ではあったが、ふと想いたったかのように探索を始めた。

『天使』

と言う単語で、ホームページが引っ掛かってこないかと想いたったからである。

すると、五十件近く引っ掛かって来た。

『天使の誓い』

『天使の楽園』

『天使のわだかまり』

他多数。

それらのサイトを見て回ったが、しかし、『ピン』と来る内容の

物は無かった。

それにしても、こうたくさんの天使に関するホームページが有るとなると、まんざら人は天使を軽視していない。そして惹かれると云う事は明らかなのだと実感した気がする。

まず、天使とは『神の御使い』であり、天上では神に仕え地上に向つては神からのメッセージとして人間に伝える役割を担っていると言うのが原則で有ると云う事だった。

特別、キリスト教を学んでいる訳でも無く、こう云った類いの事を身近に感じる事なかった朔夜にとっては全く未知数の多い分野だと云つて過一言では無く、こうやってホームページに載せられている、より詳しい項目を読んで行くうちに次第に飲み込んだ気がした。

だけど、実際聖書やそれに付随した書物に載せられている天使像と云うものは、確かに人々の心に、魅力有るものとして映るのかも知れない。

この時代、神も仏も無いもんだと云われるが、人は、何かに縋つて生きなければ、生きていけないのかも知れないとそう感じた。

確かに、天使が現れる夢は存在する。夢を見た人の良心や真心を代弁し、苦境からの脱出方法を導いてくれるといった類いがそうだ。このような状況下、天使が夢のなかに現れて神からの言葉を残して行くと云う所が気に掛かった。もし、自らを『天使』だとそう云い放つた雅樹が、人々の夢の中で、人道に反する事を囁いたとしたらどうであろう？人はそれを一つの啓示だと信じてしまったとしたならば……

そう考えると今迄の事存についても納得が行く。夢占いに関しても、源流は神の御言葉を聞く為の物としてとらえられている。

面白半分にそうしたのか？それとも何かの考えがあつてそうしたのか？

しかし理由が何にしる、黙って見過ごす事などは出来ない。そう考えて、朔夜は焦った。

次のターゲットは誰なのか？

そんな事を考えている中、一通のメールが飛び込んで来たのである。

全く身に覚えの無いメールアドレス。

しかし不吉なのは、そのアドレスのアカウントは横文字で、

『墮落した天使ルシファー』

朔夜はこれを見た瞬間、ルシファーがどういうものであるのかも分からずに、即座にそのメールを開いたのである。

それには件名は載っていないかった。そして内容を読みはじめる。

そして、出だしは紛れも無く探していた『天使は全て知っている』であった。

『仕事ははかどっているかい？天使は悪にも、善にもなり得る。そして人はそのどちらを選択しようとする者自身の心で捕らえる事ができる。ならば、悪に身を滅ぼそうとそれはその人の勝手だとは想わないかい？すでに、下北沢に式神が飛び交っているようだが、それは無意味と云うもの。オレの心は、もう決まっている。それでも止めようと思っているのならば、ここにアクセスしてみると良い…』

それだけ書かれたメールをアドレスそのままに送り返そうと試みたが、既にアドレスを変えたらしく戻って来た。雅樹には全てお見通しなのであるうか？

このメールが、賭けの張本人。雅樹から送られて来た事は明白ではあったが、朔夜は仕方なく書かれてある通りに、そのアクセス先のホームページを覗いてみる事にした。

長たらしいそのアクセス先のアドレスは裏ホームページであるらしく、無気味にも真っ黒な壁紙に赤い文字で作られたホームページだった。

中心には、真っ黒な羽根に『DEATH』と書かれてある。  
そして、タイトルは、紛れもなく探していた『天使は全て知っている』であった。

### #3 心の闇

#### 心の闇

無気味なそのホームページにある掲示板は、憎しみ、怒り、悲しみがツラツラと書き記されており、最初、掲示板の書き込みを見た瞬間、朔夜はその内容を読むのが躊躇われ頭がクラクラした。人とは、こんな所で全てをぶちまける事ができるのであるのか？誰にも言えず悩み、怒りのぶつける場所も無く、ネットを頼って書き記された内容。見ていて気分を害してしまった。

確かに、今流行りの出会い系サイトや、自殺願望のサイトが有り、噂には事件として取り上げられていると聞いてはいたが、実際こういう所に入ってみると、こんなにも人の心は荒れずさんでしまうものだとは、想ってもいなかったのである。

「ネットも考えもんですね……」

今や、どこの家庭でも、気軽にネットを楽しむ事はできる。しかし、こういうページがあつて良いものであるのか？そんな事はあつてはならないのでは無かるうかと、溜め息をつきながらそう想つた。しかし、だからと云つて落胆ばかりしている暇は無い。いち早くこの中から標的となり得る人物を見つけ出さなければならぬ。

一件ずつ書き込みをチェックして行く。すると、簡単にイニシャルに該当する人物らしき者の書き込みを発見した。その人物のHNは中島清美。その内容は次のような物であつた。

「今朝、天使様は私の前に現れた。全てを消化するにはあの人を地獄に突き落とすしかない……今夜私はそれを決行することにする」

短い文面で、『あの人』とは誰か判らないそんな書き込み。それは今朝書き込まれたものと判明した。すると直ぐさま朔夜は過去

の書き込みを見て回った。それらは決まって朝と夜に書き込みされている。つまり、『決行』と云っている今夜迄にもう一度ここに書き込みをする可能性があると言う事である。いや、そうあって欲しいと、朔夜は願った。もしかすると、その『決行』を阻止出来るかも知れないとそう想ったからである。

そこで、一つの賭けに出た。今は、夕方。これから先も次々と増えて行く書き込みの中、果たして気がついてもらえるか？そんな賭けに……

## # 4 交換殺人

### 交換殺人

この掲示板は、レス仕様にはなつてなく、一方的に書き込んで行く者が多い。その中で、朔夜がこのメッセージを残すのは異様かも知れないと想った。しかしだからこそ、こうする事で目に止まってくれる事が一番の得策だと想いたったのである。

それは、次のようであった。

「天使の云った事とはほどの様な事なのでしょう？もし良ろしければ僕にも参加させて頂けないでしょうか？交換条件にて」

そんな書き込みをした後、朔夜は中島清美なる者との接点を見出しそうと考えた。まず引つ掛かってもらわないとしようがない。そうなる為になんかをしなくてはならない。そのような中、時間が許す限りの書き込みを行った。掲示板は何度もアクセスしてないと次から次に新しく書き込みが行われ、自らの書き込み内容が消えて行く。その上変更が判らない。

それを見越しながら時間を置いてはアクセスして行った。

時間が刻々と過ぎて行く。流石の朔夜も落ち着いてはいられなかった。これが、雅樹との賭けだからというのではなく、今となつては、一つの事件を解決する者であるならばと云う想いの方が強かったからかも知れない。

そんな時、携帯の着信音が鳴った。

「もしもし……朔夜さんですか？」

それは今度こそ紛れもなく、昼間連絡が取れなかった神楽からのものであった。朔夜は複雑な思いを秘めながらこの声に安堵を覚えた。

「神楽さんですか……今日はどうなさったのです？」

「すみません。それが、わたくしにも何がどうしたのか分からなくて……今朝家を出ようとしていた所迄は覚えているのですがその後の記憶がないのです。気付いたら、ベッドの中で……」

記憶の抹消を雅樹が行ったのかも知れないと朔夜は思ったが、

「こちらは気にしておりませんよ。それより、気になりますね……記憶がないとなると……」

事態はだいたい掴める。だけど、それを神楽に悟られるとどれだけ悲しい想いをさせてしまうかと考えた朔夜は、なるべく話題を逸らせなければと思った。

「今日は、ゆっくり休んだ方が良いかも知れませんね。また体調が良い時にでもゆっくりお話ししましょう……あ、お母さん今日は気分が良さそうでしたよ。早く良くなれば良いですね」

「お見舞いして頂いたのに、本当に申し訳ありません。そうですね、今日の所はお言葉に甘えさせて頂きそうさせて頂きます……あの……あ、いえ何でもありません……」

一瞬何かを云いかけようとしたが、神楽はそれを否定するかのようには言葉を切った。それが何であるのか気にはなったが、自分から話さないのならば朔夜は問い返さなかった。

しかしこの時、聞いていたなら事の事態はもっと良かったかも知れない。そう、この時隠した神楽の言草はこの後の全てを担っていたのである。

そして時間はまた刻々と過ぎ去って行く。夕飯をとり摂り、敢えず緊張感を解いたそんな時、あの裏ホームページを覗いてみた。時間はもう夜と云って良い時間になっていた。

すると、そこには待っていた自分宛の書き込みがあった。一か八かの賭けは成功したのである。

「文換とはどう云った事でしょう？具体的に聴いてみたいです。このホームページのチャットで待っています」



簡潔に書かれた書き込みに、チャットの指示があった。その通り朔夜はチャットルームへと足を延ばした。基本的にチャットは覗こうと思えば誰でも覗ける。しかし、このページは上手くプログラムを作っているらしく、その相手にしか覗けない。そこで、部屋に入っている人のHNを選びだし指定して朔夜はその相手、中島清美へとメッセージを率直に打ち込んだのである。

「『決行』とはもしかして殺人ですか？」

「そうです」

「ならば取り引きしませんか？僕と」

「取り引き？」

「交換殺人です」

「あなたも誰か殺したい人がいるの？」

「そうです」

「誰？そしてそのメリットは？」

「誰とはここでは詳しく云えません。邪魔な人を消す事。メリットは、警察に疑われない事」

「なら私、もそう。疑われないと言う保証はある？」

「ここでの事は、プログラムのため警察に知られないでしょう？それに僕とあなたは基本的に面識がない。あなたは下北沢に関係がある人ですね？」

「良く分かったわね……あなたは誰？」

「僕も下北沢に関係がある者なのですよ。どうです？話にのりませんか？」

「判ったわ。で、どうするつもり？」

ここ迄話を進めて、朔夜は戸惑った。交換殺人を考えた迄は良い。自分がその人物を殺さないで、この中島清美と名乗る者を殺人者にしなければ良い訳だから……しかし、自分が殺したい相手はいない

のだ。そこで考えた末、

「秋元総合病院を御存知ですか？」

「ええ。知っているわ。私が勤めている病院よ」

「そうですね。奇過ですね。その202号室に入院している塚原叶と言う人物を殺して欲しいんですよ」

叶なら事の次第を飲み込んでくれるだろうと想い咄嗟に申し訳ないとは想いつつ、そう書き込む。しかし、余りにも偶然である。勤め先がかぶるとは……これも、雅樹のシナリオの内なのか？

「そう、分かったわ……都合良く私が殺したい相手も秋元病院の関係者よ。こちらも全てを明かすわ。殺したい相手の名前は、沼淵佳子。看護師よ」

「ならば、その相手の住所を教えただけませんか？今夜の『決行』を確実にしています」

「判ったわ。住所は……」

こうして、二人の間の密談は終わった。

住所は、下北沢の南の方で先にファイリングしておいたデータの中にもその住所が載っている。

つまり朔夜の範疇にある訳である。しかし、当の相手は今日は準夜勤で夜中の帰宅になるらしい。後は、叶に連絡しなくてはならない。中島清美は明日、病院の薬物を用いて叶を殺す算段を立てた。

これは、医療関係者ならば誰であっても簡単になし得る。主治医となればいとも簡単に。

しかし、一つの要求があった。沼淵佳子の死を確認できて初めてこの話はなし得るのだと云う事だった。

## # 5 偽証

### 偽証

「……と云う事なんですよ」

全ての事の成りゆきを、病院のナースステーションに繋いでもらい朔夜は叶に電話で話して聴かせた。

「そんな事になったんかい……こっちもつかうかでけへんなあ……しかし、俺らマサキの手の平の上で踊られてとるみたいやなあ」

事の重大さに、気遅れしている風は見られないが、叶自身緊張感を持っているみたいである。

「しかし、よお、俺を殺してくれなんて思い付いたもんやなあ」上出来つちやあ上出きやが、ホンマは本心とちやうか？」

茶化したように受話器の先で笑って云っているが、叶の性格から考えると怒っているかも知れない。

朔夜はそれをごまかしながら、

「叶は、殺しても死なないタイプですからね」

和やかに話しの腰を折る。心配していない訳ではない。ただ、叶なら大丈夫だと信じているのである。

「で、どうするつもりや？その、沼淵佳子を……中島清美はこの病院の関係者だと分かった訳やし的は絞られた。HNのイニシャルKNの人物であつても、本名もKNである可能性がある訳とはちやうやる？」

「一日だけ沼淵佳子さんに病院の勤務を理由を話して休んでもらおうかと想ってます。無断欠勤なら、相手を油断させる事ができるかも知れませんか……」

「酷やな……突然殺されるかも知れません。なんて云って信じてもらえらるとは想えんな」誰やって頭おかしい想われるわ」

「それもそうですね……でも、何とか説得して分かってもらわない

と困るんですよ。別に、中島清美が誰なのかを追求する訳ではなく、この先この危うい関係を保って行く事ができるかどうかの瀬戸際なのだ。僕は想うのです」

悲劇がこれで終わるのか？この先雅樹とのもう一つの賭けは存在している。何かの過ちでそれを犯す訳には行かない。

「決心は固いようやな。なら、好きなようにやれや。こっちは止めへん」

こうして、明日迄の算段を二人が立てた後、静かに携帯の音は途切れた。

朔夜は、沼淵佳子の勤務時間終了を待ちアパートを出た。真夏の深夜だと云うのに人通りが少ない。そろそろお盆の時期だからかも知れないなと想った。気温も丁度良く、昼みたいに不快指数は感じられない。

沼淵佳子の白宅は、一戸建ての家で、その家の前は密集した人家と店が立ち並び、意外とひっそりと隠れる場所もある。待ち伏せるのは容易であった。

時々静かな街灯の下を歩いてくる足音が聞こえてくるとその方に目を配る。しかし、どれも沼淵桂子らしい人物ではなかった。

満月の下、朔夜は一度睡魔に襲われかけたが、何とか意識を取り戻す。今寝る訳には行かない。三日間の過酷な試練が待っている。そう想うと逆に目が冴えてきた。そんな折、一台のタクシーからおりる人影が目に入った。待っていた沼淵佳子が現れたのである。

「沼淵佳子さんですね？」

穏やかな口調で警戒心をなるべくおこされないように、自宅に入る為の門をくぐろうとした沼淵桂子に、朔夜は声を掛けた。

「ええ、そうですか……」

しかし、想った通りの反応。訝しげな目で朔夜を見た。

「こんな事を云うのは変だと思われるのですが、貴女は、誰かに恨

みを買っているようです。もし良ければ僕の話を書いて頂けませんか？」

なるべく、慎重に話を進める。決して、殺される事になつてなごとは云えない。

「……あの……何故そんな事を見ず知らずのあなたに云われなければならぬのですか？面識もないのに……それとも何処かの探偵さんですか？」

少し怒つたような表情で朔夜を見る。

「あ、申し遅れました。僕はこういふ者です」

そこで、名刺を見せる。

「夢占い？都住朔夜さん……あ、夢関係の本を出版されているあの都住さんですか！」

ここでも、何とか理解してくれる人がいてくれた事に感謝した。

「でも、その都住さんが何故そんな事を？」

「実は……」

今日あつた事を簡潔に話して聞かせる為には、骨が折れる気分だった。ただ、賭けの事だけは避けておく。それは自分自身の問題であり、沼淵佳子には全く関係のない事であるから。

「お話の内容は分かりました。で、私はどうすればよろしいのでしょうか？」

一通り話した後、朔夜がその為の対策を話そうとした時、一陣の風が巻き起こつたのである。

「！」

まるで、小型の竜巻が二人のいる方に向つて斬り付けるかの勢いで巻き起こつたのだ。

「残念だったね、都住朔夜！」

頭上から声が聞こえて来たのに気付き、辺りを見回した。するといつの間にはびこつたのか、辺りの樹木がうねるかのように朔夜達

を取り巻いていたのである。

「ヒントは簡単だっただろ？でも、この賭けを切り抜けるのはここからが大変なんだよ！」

はす向かいの四階建てアパートの屋上に月の光の下動く人影が見えた。どうやらそこにいるらしい。そしてその声は紛れもなく、

「雅樹か！」

「気軽に、ファーストネームで呼ばないで欲しいな！……胸くそ悪い！」

すると雅樹は片手を振り上げ、振り下ろす。

まるで剃刀の刃のような風を樹木達を操る事でまき散らしてくる。それを、朔夜は沼淵佳子の前で身を呈して受け止める。その為、夏着の薄い服が裂かれ、至る所に傷が出来、血が滲み出してくる。

「痛〜！」

「今のは手加減したからね……次はこうはいかない！」

手の平から青白いオーラが見える。朔夜はそれを初めて見た。そしてこれからきつと式神を出すのだと想った瞬間、それ目掛けてオレンジの光線が飛び込んで来た。それは、青白いオーラを消し去るかのような勢いで、包み込むと一気に分散した。

「何！」

雅樹の物とは違う、一つの光。それが、叶の式神である事はもう疑う事はない。式神を見た事はないが、下北沢の護衛に飛び立った琴音。それ、であるのだと。

暫くすると、ヒラヒラと焼けこげた紙切れが舞い落ちてくる。それを手の平で受け止めると、朔夜は握りしめた。そしてスポンのポケットの中に仕舞い込む。

「小賢しい！ネズミがウロチヨチヨロしてるとはな……都住朔夜！お前は一人では何も出来ないのか！」

「一人で何でもできると思っっている方が驕っているのではないのか！」

「ちっ！下らん論争はいい！このままねじ伏せるまでだ！」

朔夜の言葉に一気に頭に血が上ったのか、

「翔！開眼！」

雅樹は印を結び突如マンションから飛び下りると、樹木がゾロゾロとその着地点に集まりクッション代わりのように雅樹を受け止める。そして躊躇いもなくうねる樹木を引き連れスタスタとこちらにやってくる。

その様子を隠れて見ていたのであるう、沼淵佳子は、ガタガタ唇を震わせながらその場に立ち尽くしていた。朔夜は、その前に立ち塞がるようにしっかりと身体を盾にしている。

全身の開いた傷口がズキズキと疼く。そんな朔夜の前にしたり顔で雅樹に立ちはだかった。

「どけ！」

右手で払い除けるように朔夜の肩を叩いた。

「まさか……そんな事する訳ないでしょう？」

「冗談じゃないと、雅樹を睨み付ける。

その利那、『ドス！』

鈍い痛みが一発、朔夜の鳩尾に送り込まれ、前のめりに身体が崩れ落ちる。意識が飛ぶと同時に地面が顔に触れた。

「偉そうな口を叩く前に、護身術でも学んでおくべきだったな……

アハハハハ！」

甲高い笑い声の中、意識が遠退のいて行く。何とか雅樹の足首を掴んだ時、沼淵佳子の絶叫がこの街全体に響いた。

朔夜が最後に目に映し撮ったのは、真っ赤な血で染まった世界であつた。

## # 6 不快

不快

先程から、バタバタとけたたましい物音が耳障りでならない。不愉快な現状を腕を持ち上げ眩しい光をこらしてみるように、掌で目を覆うようにしてた時に気が付いた。おびただしい迄の血液。それが掌にびっしりと塗り込められていた。そしてそれが意識を取り戻した朔夜の現状であった。

「……どこでしょう？ここは……」

「朔夜！」

遠くで慣れ親しんだ声が聴こえてくる。朔夜の周りでパタパタと看護師達がガーゼやら包帯やらを取り出し手当てしている。

その中で身を捻らせ、朔夜は声の方を向いた。

「大丈夫なんか？お前……」

「叶？ここはどこなんですか？」

「見たら分かるやる。病院や病院！」

「何故僕が病院に？」

確か、沼淵佳子と一緒にいて雅樹と出くわし……

「沼淵桂子さんは？」

朔夜はゆっくりと考えながら、そして叫んだ。血の気が引いて行くのが分かる。最後の断末魔。

それが今、確かに朔夜の耳に蘇った。

「すみませんね……事情聴取とらせて頂いて結構ですか？都住朔夜さん」

朔夜の意識が回復したのをきっかけにしたのか、壁に寄り添っていた一人の眼鏡を掛けたエリートサラリーマンのような風体の男が話し掛けて来た。

「どなたですか？」



見た事もない……いや、でも何処かで会っているような……

「君たち、席外してもらえまいか？」

その男は、朔夜を取り囲んでいた他の者達をドアの外に出るようにと促す。ついでに、もう意識も回復したのだからと、医師達も遠ざけた。それを確認したところでその男は眼鏡を外し、はにかみながら微笑んだのである。

「久しぶりだな。都住」

その笑い方でハツと気がついたのである。

「あ……もしかして、城戸直紀君……」

あまりにも惚けた顔に、叶が、

「そうそう。思い出したか？高校で同じクラスやった直紀や。今は、広域捜査官の警部やと」

直紀の肩を気軽に叩きながら付け加えるように朔夜に云う。

「その年齢で警部……エリート街道まっしぐらなんですね……」

と、のんきに話していたいが、直紀は事の次第を率直に朔夜に問いただした。

「沼淵佳子とはどう云う関係だったんだ？まあ、お前に限って殺しをやるとは思えない。それにあれば、人問技とは思えないが……」

その言葉で、朔夜は想い出したくもない光景が頭を過った。しかし、これを警察に話したところで信じてはもらえないであろう。いや、直紀なら判るかも知れないが、だからそうだと云ってその他の警察官が納得するはずなどない。朔夜は黙って叶を見た。

「俺らの事理解しとる直紀には正直に話しといた方がええんとちやうか？」

叶は、溜め息をつきながらただそれだけ口にした。

「判りました」

そこで、直紀に全てを話して聴かせた。

賭けの事。ホームページの事。沼淵佳子の事。そして、この病院でこれから叶に降り掛かるかも知れない事。全てを……

こうして全てを聞き終え、静まり返った直紀が発した一言は、

「阿呆」

まずは、その一言だった。

「まあここに、あの腐れ縁の塚原と一緒にいるんだからそれくらい分かりそうなものかも知れんが……もつと頭を使え。実践の戦力ならいくらでも俺が貸すだろうが……と云っても、相手が陰陽師とあつては、俺達がどうこう出来る訳ではないが、これから先の刑法に立証ができるかも知れないだろうが！そこ迄云わなければお前達は判らないのか！」

つまり、昔なじみに一言も相談されなかったと云う事で腹を立てているのかも知れない訳で……長々と直紀の説教は続いたのである。

「で、ホシは錦織雅樹なんだな？」

結論的にはそうである。刑法的にどうこういう前に、直紀は口走った。

「経歴等こちちで探ってみる。後、叶には万全の警護を付けるから心配するな。取り敢えず、上層部と部下には俺から上手く云っておくから心配するな」

との、最後の言葉を後にしようとして直紀はドアを開けて閉める時、「都住？毎年送ってる年賀状。それに連絡先書いてるから……見とけな！」

それだけ云ってブツブツと出て行ったのである。

「やられたなあ〜一本とられたわ。朔夜？」

「毎年来る年賀状、山積みの段ボールの中で眠ってますからね……探すの一苦労ですよ」

一息入れると、本題に移った。

云いたい事だけ云って去って行った直紀には悪いが、朔夜は叶からここに来る迄の経緯を聞き出さなければならなかった。

叶が知っている限りの事から察するに、絶叫の声に気がついた沼淵佳子の両親が、警察を呼び救急病院に連絡をしたらしい。そして、

朔夜が渡した名刺で朔夜の身元は判明できたらしいが、沼淵佳子の頭はまるで脳内に植物の種でも仕掛けられたかのように発育し全てを吹き飛ばした。即死状態で酷い死体となって転がっていたそうだ。叶に連絡が行ったのは、連絡先の名刺に叶の名前も入っていたからである。しかし、この病院を突き止めるのは、難解だったはずだ。ただ、運良く叶の携帯の電源が入っていた事が救いだったのである。

「そうですか……沼淵佳子さんは亡くなっただんですね……」  
「……」

今回の件で、一番傷ついているのが誰かを悟っている叶は、何も云えなかった。朔夜の父が亡くなった時の憤りが今まさにここに復活しているのではなからうかとさえ思った。

そして、雅樹は本気でこのゲームを行っている。それも手加減なしに、なり振り等気にせずに……

「神楽さんには申し訳ないですが、こうなった以上、こちらもなり振り等構ってはいられませんね……僕はこれ程の怒りを覚えた事はありませんよ」

口に出してそれを云う、叶はこんな朔夜を目にした事はない。その怒りがいつもにも増して、朔夜の真っ赤なオーラを浮き立たせていたのである。

## #7 警戒

### 警戒

その後、朔夜と叶はナースステーション横に設置されている休憩所へと移動した。

まだ夜明け前の時刻で本当は就寝時刻ではあるがこの事件のせいで寝ている事などできなかった。朔夜は十分な処置を受けて一段落はついていた。そしていつしか、雅樹から受けた鳩尾への打撃も薄らいでいた。

「これ、叶の式神の札……」

ズボンのポケットに仕舞い込んでいた焼けこげた一枚の紙を叶に手渡した。

「ああ、気付いとった。琴音やろ……大丈夫や。今は深い眠りに就いとる。少しは投に立ったようで良かったわ」

受け取った叶は、それにフツと息を吹き掛け再生の念を送った。

すると、元通りの札に戻る。

「マサキ、かなりの陰陽師やな……俺がその場におったからと云っても歯が立ったかどうかしれんわ……あんま自分を責めるなや……朔夜。自分を大切に出来んもんが、他人を労る事など出来んのやからな……」

ボソリと零す。そう、叶自身にもどうにかなるその要素はないに等しい。自信がないのである。

「……そうですね。今はこれから先の事を考えましょう。この事件は必ず、今日の朝ニュースにとり上げられます。城戸君が情報操作をしたとしても、マスコミは必ず動きまます。そうになると、この事件を知った中島清美は、叶を狙うでしょう」

「ああ、可能性は100%間違い無しや。1%の裏切りを期待するのは無謀やな」

叶は頭を捻っていた。もう十分中島清美の願いは叶っているはず。しかし、その人物の性格がどうだろうと、裏には雅樹が絡んでいる。「計算はどこ迄上手く行くでしょうか？」

「さあ、どうやる……手荒な事はせん。訴える事もせん。上手く行くかは本人次第やわ」

「ところで、僕が気絶していた時間はどのくらいですか？」

「小一時間や」

「一時間くらいなら、こちらは上手くやれます。あとの事は任せますよ」

「ああ、分かつとる。まかせろや」

そんな会話をしていると、バタバタと急ぐ足音が聴こえてきた。その姿を、薄暗い廊下の中気付いた朔夜は、

「あ、神楽さん……」

「え？」

自分の名前を呼ばれた事に驚き、こちらを振り返った、一人の女性。それは、まさしく神楽であった。そして、ソワソワとした様子で近づいてくる。

「どうしたんです？そんなに慌てて……何かあったのですか？」

そんな問いかけに、今にも泣きそうな表情で、

「母の容体が急変したのです。さっき連絡がありました、それでこちらに……」

「急変？ですが……昨日の昼は調子が良さそうだったのに……」

その言葉への答えは返ってこなかった。グツと何かを飲み込むうとしていたようである。そして気が付いたかのように、

「朔夜さんは……あ、その怪我はどうなされたのです？」

二の腕から手の平、ボロボロになった体全体。

あちこち巻き付けられた包帯に気がついたのか、息を飲み込むかのように恐る恐る問いかけてきた。

「あ、これですか？……ちょっと階段から転げ落ちました……」

どう考えても階段から落ちてできる傷ではない。打ち身でこんな

風に怪我する事も無い。分かり切った事に嘘をついてみせた。

「それは嘘ですね……」

「……」

「もしかして……弟の雅樹に関係があるのではありませんか……？」

これ以上、黙っておけないと察した神楽は、突然真意をついた事を問い返してきた。

「！」

朔夜と叶は絶句した。勘付かれた？しかし何も悟られるような事を云った覚えはない。そうすると……もしかしたら何かを知っているのかもしれない。色々と考えるがその答えは神楽が握っている。

「黙っている所を見受けますと、雅樹なのですね？あの子は今どうしてるのです！？」

突然：大人しい神楽の見た目に反するかのような詰め掛けるような様子に朔夜は驚いた。こんなに取り乱す彼女を見るなどは想ってもいなかった。

「落ち着いて下さい……どうなさったのです？神楽さんらしくありませんよ……」

震える神楽の肩をしっかりと受け止める。しかし、その態度は変わらない。急に、朔夜を見上げると、視線を脇にそらし、隣にいる叶を見た。

「そちらにいらっしやるのは、塚原叶さんですね！あなたも陰陽師なら分かるはずですよ、逆風の対処法を！云うべきでは無い事は分かっています。でも、雅樹の……あの子の対処法は、身内を人柱にすることなんです！母は……うっ……」

神楽の瞳から一筋の涙がこぼれ落ちそのまま泣き崩れた。

「！」

ひよんなことから、雅樹の全貌を知らされ、朔夜も叶も一言も言葉が出なかった。そして、暫くそのまま神楽が泣き止む迄待っていたのである。

「とり乱して申し訳ありません……わたくし、母の所に参ります。本当に申し訳ありませんでした」

泣き止んだ神楽が発した言葉はそれであった。そして、急ぐようにその場を後にしようとした神楽の二の腕を朔夜は取った。

「もしかしてあなたは、この事を知っていたのではありませんか？いえ、僕達がどうこうと云うのではなく、これまでの事件の裏に隠されている何かを感じ取っていたのでは？双児には色んな不思議な力があると聞かされます。雅樹君に陰陽師の血が流れているなら、神楽さん、あなたにも……」

その質問に、神楽は一瞬寂しそうに笑った。そして一回縦に首を振り、そつと朔夜から離れ、

「母は、もうこれ以上もたないでしょう。次は私の番です……汚れ切った血筋は何も生みませんね……それが錦織家の最期になろうとももうどうでも良いんです……」

何かを断ち切るかのように勢い良く、振り返りそして、暗闇の中去って行った。あの、和やかに家族の話をした時間が色褪せていく。そして朔夜と叶はそれを黙って見送るしか出来なかった。

朝は、雨雲を携えた嫌な天気だった。それは今朝方個室で亡くなった、神楽の母を悼むような、そんな一日の始まりだった。

直紀が気を遣い配置した警備を断り、今日一日は決して点滴等の処置を行わないと云う決まりでその場を切り上げた。

叶は、既に朝食をとるために病室で横になっていた。その横には、朔夜が付き添っている。二人とも神楽の件から何も語らず静かに考え事をしていた。

大体の真相は掴めてきたような気がする。実は錦織家は代々陰陽師の家系で、そして、雅樹、神楽にもその力が宿っている。しかも、二人の間にははかりしれない溝がある。それを、今回の事件で母を殺してしまう程の逆風を浴びせてしまったことで、次は神楽にお鉢が回る事になる。血が死を招くそんな家系だとは……やり切れない

思いが朔夜の中で渦巻いていた。叶は？叶の術の逆風対策は？ふと、叶の顔を見た。

「叶は違いますよね？」

ボソリと呟く。

「何がや？」

惚けているのか？それとも、木当に分かっていないのか分からないが、それだけ云うと叶は黙り込んだ。しかし底しれない怒りが伝わってくる。だからその先は何も云えなかった。そんな時、

「塚原さん、朝食の時間ですよ〜廊下に取りに来て下さいね〜」

四人部屋の一角を仕切っているカーテンをくぐると、一人の看護師が入って来た。

「ああ、分かったわ〜今日は、点滴や検査無しなんよな？」

「ええ、その予定になってますよ。昨日は大変だったそうですね。

朝食とって昼まで寝ていても結構ですよ〜」

いつも世話をしてくれるその看護師は丁寧に答えてくれる。

「ほな、朝食食べるか」

叶は、静かにベッドから起き上がり自由な足で廊下迄歩いて行くとお膳をとって来た。

「朔夜、お前も食堂で飯食って来いや。ろくなもん食つたらんやろ？この飯は栄養だけは抜群やしオレだけ食うのも気が引けるわ…」

…」

その言葉を受け、朔夜は一階の食堂へと足を運んだ。しかし、一階の食堂の時間は面会時間を見越しての開店だったので、朔夜は仕方なく売店でパンを買う事にした。それを持って、叶の病室で食べる事にしようとゆっくりと歩を戻した。

「塚原さん、やはり点滴をする事になりましたよ」

朝食を食べ終え、お膳をかたしに行った先で、通りすがりの看護師が静かに声を掛けてきた。

「え？そうなん？」



その看護師の顔に見覚えがなかった。そこで確認の為に名札を見た。名札には、二宮和恵とある。叶は、訝し気にその看護師を見た。そしてにっこりといつも営業スマイルで、しらじらしく、

「変やなあゝ無いつて聞いてたんやけど？」

「何やら問題があったようですが、主治医の判断です。また後で病室の方に参ります」

少し暗い感じのその看護師は、それだけ言うとスタスタとナースステーションへと向って行った。

「ビンゴやな……」

叶はその後ろ姿を見送りながら病室へと歩いて行った。

その看護師は、その後直ぐに叶の病室に来た。まだ朝早いので、どこの病床もカーテンを引いていた。プライバシーを守る為の物でもあるし、一人になりたい者にはうってつけである。

二宮和恵はそのカーテン越しに、

「点滴をします。入りますね」

一言添えて、入って来た。

カラカラと、点滴用の器具を設置しながら、テキパキと行動している。歳はまだ若い。しかし、滲み出しているオーラは暗く濁った青色をしていた。

「その点滴の薬品何てのや？」

叶は、興味深げに問いかけた。

「ビタミン剤ですよ」

簡潔に答える。しかし、テキパキしたその行動の先に、いざ針を叶の左腕の静脈に打とうとする際、一瞬であるが戸惑いが見られた。「無理な事はせん方がええで……天使は全てを知っているだろ？二宮はん！」

打たれる針を避け、左手で二宮和恵の腕を叶は取り上げた。

「……何をするんですか！」

二宮和恵は震えながら腕を振り払い突然声をあげる。それをき

かけに、

「縛！沈在！」

呪文を唱え、叶は二宮和恵の顔前に左指で印を結んだ。

「朔夜、出番やで！」

その一声で隣でパンをかじっていたハズの朔夜はスツとカーテンの隙間から現れた。そして動けなくなった二宮和恵の目の前に手の平を持って行くと念を送った。お得意の催眠術である。二宮和恵はゆっくりと目蓋を閉じ、叶のベッドに倒れ込んだ。その身体を朔夜は静かに抱きかかえる。そして叶がベッドから這い出たのを確認すると、そのベットに横たえる。

「それでは行つて来ますね。後は宜しくお願いしますよ！叶！」

「ええで……」

その眠りを追うかのように朔夜はベッドの片隅に上半身を頂けた。四方には結界の札を張り付けられている。安心しきつて朔夜は二宮和恵の夢の中へと旅立ったのである。

「助けて、誰よ！私を追わないで！」

真つ暗な暗闇をひたすら駆けずり回る二宮和恵。

パンプスを履いた足音が、カンカンと木霊する。

朔夜はその有り様を暗闇で浮かび上がるその影を空中でとらえていた。

追い掛けている相手は探偵のようにつかず離れず走っていた。

『異性間の問題のようですね……』

特に多いのにこの類いがある。二人の問題は、この辺りにあるらしい事が判明した。

『きつと、沼淵佳子との間の三角関係が原因なのでは無いだろうか？追いかけられるのは、仕事上と云う事もあるのですが、相手は探偵……やはり妥当でしょう……』

目をこらし、その状況をインプットした。そしてこの状況を変える為に、

『神聖覽強！夢売買致します！』

朔夜は辺りのこの状況をなぎ払う為の夢交換を行う事にした。一時間の睡眠の代償を克服するには早い内がいい。

辺りは一気に白い空間を作り上げた。そして、追いかける人物の影が一気に明らかになった。その人物は、黒いコートを身に纏い、顔全体を深い帽子で隠している。

その人物が誰なのかを突き止める為に、朔夜は、

『散！』

その人物の着ているコートと帽子を取り上げたのである。

『沼淵佳子！』

朔夜は驚いた。死んだはずの人物がこの夢の中で追い掛けまわしているのだから……

「嫌よ、来ないで！」

後ろを振り向いた瞬間、それが、自分が殺そうと目論んでいた人物だと知り、よりいっそう走る事を止めようとはしない二宮和恵……

『面倒な事になりましたね……どうしましょう』

朔夜は考えに考えた。こうなると厄介である。

天使の啓示を信じている二宮和恵に関しては、夢を好転させる事を考えるより、逆に、突き落とされる自分を考える方がいいのかもしれないとそう考えた。

『場所を移しましょう……神聖覽強！夢売買致します！』

そして、断崖絶壁の構図を重きに置いた。

追いかけられる先、そこは荒れ狂う海への絶壁。ジリジリと追いか詰められ、二宮和恵の置くべき足下はもうない。

「悪かったわよ！あなたを殺してあの人を手に入れる事ができるなら、私は何だって出来るわ！でもね、佳子あなたが悪いのよ！人気があるからって、何でも手に入らない物が無いって思っているあなたか！」

ジリジリと、追い詰める沼淵佳子。

「でもね、後悔しないなんて思っては無いわ。唯一の親友ですもの

ね……あなたと一緒にいる時間は楽しかったわ……これは本当よ……」

カラリと、岸壁にある岩が崩れ落ちた。

「何か云つてよ！」

二宮和恵は叫んでいた。息せき切った声はカラカラに乾いた喉から発せられ、かな切り声であった。それをきっかけに、

「あなたが死ぬ所を見たらスッキリするわ。私を納得させて……これは夢の中。そこから落ちたとしても、死ぬ事は無いわ。私の事を思っていてくれると云うのなら実行してみせてよ！」

荒れ狂う海の岸壁は現実味を帯び、下を見下ろした二宮和恵はガクガクと膝が震えている。夢だとしても、怖くて飛び降りるなんて出来はしない。

「どうするの？それとも全部嘘なの？怖いなら手伝ってあげる……」

沼淵佳子は、トンツと二宮の肩を押そうとする。足場が今にも崩れそうだ。

「本当に夢なのね？信じていいのね？それで許してもらえるのね？」

二宮和恵は困惑していた。しかし、それを紛らわすように沼淵佳子はニツコリと微笑んだ。

「さようなら……佳子……」

海の方を振り向くと二宮和恵はトンツと空中へ身を投げた。そして断崖の果てへと消えてしまったのである。

『全て片が尽きましたね……僕も限界です……』

そして、この夢は静かに幕を下ろしたのである。

目を醒ました朔夜を、叶は静かに見守った。そして、微笑んだ。

「見てみい……」

ベッドの上に横たわっている二宮和恵の頬には静かに一筋の涙が伝わっていた。しかし、その表情は心無しか晴れやかである。そして両目蓋はゆっくりと開かれたのである。

「どうですか？ご気分は……」

「ここは？」

「現実の世界ですよ。あなたの心に潜んでいる暗い影はもう取り払いました。もう悩む事は無いんですよ」

全てがこれで終わったのだと告げる。

「あなたは？」

「僕は、こういふ者です」

名刺を差し出す。

「昨夜、あなたとチャットを交わした相手でもありません。こういふ風にあなたをおびき出した事はお詫びします。あなたに依頼した塚原叶は僕の相棒です……」

「！では、あなたが桂子を……」

現実では、沼淵佳子は死んでいる。だからこそ二宮和恵は事に及んだのだ。

「いえ、この事件を阻止する為に僕はあなたとの取り引きに応じた。しかし、それを阻む者の手で沼淵佳子さんは殺された……全て僕の責任です……だから貴女が心を痛める必要は無いのですよ」

秘めた思いを心に止め、朔夜は一通りの事情を話す。そこに天使なんて物は存在しないと否定を込めて……

「私はこれからどうすれば良いのでしょうか？犯行に及ぶ一因を作った私は……欲望のまま自分を失い、ただ見えない何かに心を委ねこの神聖な場所で人を殺そうとした私は……」

全てを聞き終え咳くように二宮和恵は朔夜に問うことしか出来ず、涙を浮かべた。一時の気の迷いだった事を悔いていたのである。

「安心して下さいあなたを訴えるような事はしません。良いですか？これは僕達だけの秘密です。それにあなたは迷っていた。そうで無ければ、針を刺す事を躊躇いはしない……ただし、これで全てが終わったとは考えられないのも事実……」

朔夜は恐れていた。賭けの日数からしてまだ一日ある。雅樹のシナリオはどこまで書き進められているのか？この占夢を考慮に入れ

ているとしてたらまだまだ油断はならない。

「もし、あなたの身に何かが……見えない何かが起こったなら、名刺にある僕の方迄連絡を下さい。これ以上の犠牲は阻止したい……」  
朔夜はすっかり二宮和恵の目を見詰めた。それを受け止めて二宮和恵は頷く。

「ありがとうございます」

ベッドから起き上がった二宮和恵は、犯さずに済んだ事を肝に命じたかのようにシツカリと地に足をつける。そして、朔夜の申し出通り、何ごとも起こらなかつたかのようにその部屋に持ち込んだ点滴の器具を携え病室を後にしたのである。

## # 8 沈黙

沈黙

それから後は、何事も無く平和な時間が流れた。

「占夢の間、厄介な術は一切なかったで……マサキは何を考えるとんやろ……」

ふと、叶は思い付いたかのように呟いた。まるで息を潜めたかのように、厳かに行われた占夢。そんな会話を吹っつけた時、ひよっこりかえでが現れたのである。

「ちわゝあれ？朔夜ちゃん来てたの？」

叶しかないであろうと思っていたのか、意外な顔をした。というより少しバツが悪そうな顔と云った方が良いかもしれない。

「ええ、ちよつとお邪魔してますよ」

朔夜は何も無かったかのような数笑みでかえでを出迎える。しかし、体中の包帯を目にしたかえでは驚いたように、

「どうしたの？朔夜ちゃん！」

大きな目を見開いて詰め掛けるように朔夜の横に座った。

「まあ色々ありました……」

しかし、

「それって、もしかして昨夜の事件絡み？」

かえでは何かを察したのか、ズバリ云い当てる。

けれど、朔夜はその事には触れず笑って聞き流しておいた。

「もう、下北沢は大混乱よ。次狙われるのは自分かも知れないってみんな引いてるわ！後、この情報はマスコミから仕入れたんだけど、ここ最近の下北沢事件関係を洗って行くと、共通して必ず夜になると起こるらしいわ……」

かえでは、そうやって自ら仕入れて来たネタを朔夜と叶に話して聞かせる。そうする事で、自らも興味を持ち奮い立たせているらし

い。

自殺未遂で踏み止まった女性が意識を重り戻し、警察に全ての事情を話した事などどこから手に入れたネタか分からないが事細かく教えてくれた。どうやらその女性は、会社の金に手を付けてその事がばれそうになり自ら命を投げ出したという事だった。その全貌にはあるホームページを介し、天使に憧れ、夢に出て来た天使の御告げに従い、自殺未遂を行ったと言う事だった。

今はそのホームページの捜査に踏み込んでいると云う。しかし、裏ホームページであらゆる所を経由しているから複雑なのだとその事で警察の手腕を持ってしてもそれを立ち上げた身元は知られていない。

ここにいる朔夜と叶、直紀以外は……

「夜ですか……確かに犯行可能な時間と云えば昼より夜の方が目立ちませんかからね。」

一見当然の事のように思われる節を云っているが、実の所、全て雅樹が夜にしか動けないのでは無いか？朔夜はそう睨んでいた。闇闇に潜む死への誘惑。それを行えるのはもしかしたら、夜だけ？いや、訳ありで夜にしか実行できないのかも知れない。

そこで、これ以上かえでに介入を許す訳には行かないと朔夜は話題をそらした。

「かえでちゃん？次のお仕事はいつになりますか？」

話にのっけると思っていたのに、その腰を折られかえではブックと頬を膨らませたが仕方なくスケジュールを話しはじめる。そうこうしていると、穏やかな時間が過ぎて行きかえではこの場を後にした。

「叶、僕はそろそろ戻ります。賭けの期限は明日まで……かえでちゃんの話から察するに、雅樹は今夜か、明日の夜事を起こすはず。叶はどうしますか？出来れば、一時退院して事の成りゆきを見守っていて欲しいのですが……。」



夜半に起こった事が、脳裏から離れない。叶のことを想うと無理な事はしては欲しくは無い。でも、不安と怒りが同居してしまった。心中は今の朔夜にはどうしようもなかった。

「オレがおったかて、役に立つかどうか分からんで……？」

そこで朔夜の表情を伺う。

「そうやなあここにおるのも退屈やし……それに朔夜一人っちのうのも心配やしな……なんや？いつも通り『お仕事ですよ』の一言でええんやけどなあ」

やれやれと云う表情で、この報酬に見合うだけの事は頼むな。とでも言わんばかりに微笑むと、

「外泊届け出してくるわー」

速やかに叶はナースステーションへと歩いて行った。

病院の反対を押し切つての行動の果て、自宅に戻った朔夜と叶は、朔夜が昨日リストアップしておいたデータの資料を見直していた。下北沢で起こりうる事を考慮に入れながら。そして、そのリストに二宮和恵の住所録が載っている事を確認したのである。

「あの看護師、下北沢の住人なんや……」

リストに目を通していた叶は嫌な予感がして眩く。それを朔夜は、「関係者と云うからにはやはり同じ下北沢の人間であつてもおかしくはありませんね。名刺を渡しておいただけで無く、この資料が役に立てるかも知れません。念のためこの住所は控えておきましょうか……」

叶からそのリストを受け取った朔夜は、手帳に書き込む。それから、昨日釘付けになったホームページを見て回った。が、そこには次のターゲットとなり得そうな人物は浮かび上がらなかった。次第に暮れ行く一日。その緊張感は二人の心に重くのしかかっていた。

そんな時、一本の電話が朔夜の携帯に流れ込んで来た。それは、祖母からであった。今日の夜、錦織邸にて通夜があるからそれに出るよつにとの事であった。

朔夜は、神楽の様子も気に掛かっていたためその申し出を無下にもできなかった。それに、この通夜に雅樹が現れるのでは無かるうかと一瞬思ったりもした。

人柱にされた母親をどう云う目で見るのか？しかし、神楽は雅樹の行方を知らない。現れないかも知れない。子供は親を選んで生まれては来れない事は重々承知している。しかし、それでも、母を慕う気持ちが雅樹に無いとは云い切れない。

「叶？ここで御留守番してもらえませんか？ホームページの監視も宜しくお願いします。僕は神楽さんのお母さんのお通夜に行つて参りますから」

「ええけど、無理すんなや？」

「無理な事ではありませんよ。このくらいの事で……それより、僕の携帯はここに置いて行きます。何かありましたら、神楽さんの連絡先を覚えておきますから、こちらに連絡下さい」

自らの携帯に登録している番号を覚えておく。通夜の最中に自らの携帯に電話を掛けて来られるのも厄介だし、礼儀に反している。そう思った結果だった。

「よう分かったわ。ほな気を付けてな」

不自由で無い左腕で軽く朔夜の肩を叩く。

「お願いしましたよ」

こうして、通夜の為の用意をして朔夜はアパートを出て行った。

通夜は厳かに行われていた。広い敷地内に建てられた大きな格式高い建物に陳列している人の数は驚く程多かった。さすが、由緒正しき家柄であることはこれだけで実感できた。しかしそれにしても、入院していた病院はそこまで大きな病院では無くて……個室だと言う他以外は何もこの家を考えてみると質素に感じられた。なぜ、もっと大きな病院に移さなかったのか？朔夜は不思議でならなかった。人柱による病気だとしても、不治の病だとしても、もっと医療技術の高い病院に入った方が家族約にも安心では無かるうか？

複雑な思いが交錯する中、焼香をあげた朔夜は、静かに黒い和服の喪服を身に纏っている神楽に礼をした。それから、身内だけの席を取り持つ事になった。

それを機に朔夜は神楽に話し掛けた。

「この度は……」

ありふれた言葉で御悔やみの言葉を話す。

「朔夜さん来て下さったんですね……」

泣き腫らした瞳が赤く染まり痛々しかった。

「お父さんは？」

「海外に出ておりまして……明日には着く事かと思われませう」

「そうですね……」

自らの妻が先立ったのに、仕事を優先しているのかと思うと神楽がよけい痛々しく感じられた。

周りを見渡す。しかし、雅樹の姿は無かった。

「弟の雅樹君は？」

「あの子は、一年程前からこの家には帰って来ておりません……どこで何をやっているのかさえわたくしには分かりかねます……」

親戚一同が介している中、大袈裟な事を云う気は無いのかも知れない。そう思い、朔夜は庭先に神楽を引き連れて二人になれる場所を探した。

朔夜の祖母の家に負けず劣らず、和風の敷地内は、風流さをかもし出していた。

「実は……」

もう、神楽の耳に入れても良いかも知れない。本当はもっと早くに云うべきだったかも知れないと後悔もしていた。賭けの事を……その気持ちは、実の双児の姉弟である二人の亀裂を生むかも知れないが黙って見過ごす事はこれ以上出来なかった。

「賭けですか……もうあの子が考えている事がわたくしには理解不可能です……全て話して頂きましてありがとうございます……あ

の、御願いがあります。その……わたくしにも手伝わせて頂けませんか？雅樹をこれ以上悪の道に入り込まないようにわたくしに出来る事があるかも知れませんか……」

「危険ですよ？」

「重々承知しております。もう、血塗られたこの家系を断ち切るにはそれが一番ですから……それと、一つ忠告があります」

「何です？」

「今夜は、きつと雅樹は動きません。わたくしの……いえ…何でもありません。取り敢えず動く事は無いと断言できますから、明日の御葬式が終わったらわたくしを御連れ下さい。あの子には到底及びませんが、微力ながらもわたくしは陰陽師の力が使えます。きつと役に立ちますから……」

動かないとどうして断言出来るのか？朔夜は問いただしたかったが、人柱の継承者。及び、陰陽師がここで味方についてもらえると有り難いとそう想った。それに身近にいてもらえると、無力ではあるが守り甲斐もある。

「分かりました。では、今夜は失礼します。お母さんの事で疲労もあるでしょう？今夜はゆっくりお休み下さい」

ただの気林めだと思う。神楽の精神的ダメージを想つと……眠る事など出来はしないだろう。しかしこのままほっておくと倒れてしまいそうな顔色だ。

「満月ですね……こういう夜は、魔が人の心に住みやすいのかもしれないですね？」

ボソリと呟いた。月明かりに照らされた神楽の横顔は今にも空気に溶け込んでしまいそうだった。

## #9 隘路

### 隘路

その夜は、神楽の云った通り何も起こらなかった。まるで何もかも見通しているかのごとく。そう、これも双子のなせる技なのかもしれないと朔夜は思った。帰宅後、叶に休むように言葉を発した叶は叶で、念のために休ませておいた式神の琴音を下北沢の護衛に解き放っていた。これで少しでも起こりうる異変を察知しようと思っていたようであった。

朔夜は休む訳にはいかず、ネット検索に夜通し掛かって目を見張っていた。そうする事で何かしら眠気を紛らわせていただけである。かえでの仕事スケジュールの事もあり、溜めていた仕事も少しだけではあるが消化しておいた。そして、賭けの最終日へと夜は明けたのである。

朝からけたたましい携帯の着信音が鳴り響いたのは、叶が起きる直前だった。

朔夜は自分の携帯を取り上げその受話器をとる。それは、二宮和恵からのものであった。

「朝早くにすみません」

「どうかなさったんですか？」

「夢に……天使が現れました。今夜罪を償えと……代償を払うのは当然だと……私はどうすれば良いのでしょうか……？」

「今はどちらですか？」

「病院へ向っている所です。あの……天使なんていないっておつしやいましたよね？でも、あの夢はあまりにも現実味があり過ぎて……佳子の死体を私に投げつけて……」

「……どうやら混乱しているようである。」

「落ち着いて下さい。天使などいるはずありません。あなたを陥れるただの夢です。だから、いつも通り仕事に勤しんで下さい。僕が云う事を信じられませんか？」

「いえ……でも……」

「大丈夫です。あなたは、あなたなりの姿勢でいつも通りしていれば良いのですよ。後は、僕達に任せておいて下さい」

「そこまでして頂くんなんて……あなたは一体？」

「ただの、夢占い師ですよ」

受話器を置いた朔夜は、起きて来た叶に、

「ターゲットは二宮和恵さんに決まりみたいですよ」

あらかたの内容はさておき、これからの行動を打ち合わせた。

昼から錦織邸の告別式に出る朔夜は、叶とは別行動をとる。叶は、一時秋元総合病院に行き二宮和恵の行動を見守ることになる。告別式が終わった後、神楽と共に叶と合流。それが、一日のプランであった。

「叶は入院患者として一時戻る事は問題ないでしょう？あと、城戸君にも連絡入れておいて下さい」

「俺の方は全く不自由ないから平気やけど、直紀巻き込むのはどうかと思うで？」

警察が格んでくるとなると、本格的過ぎて叶の範疇を超えてしまうのでは無いかと案じた。しかし朔夜は、

「叶は、怪我人です。物理的な事に関しては、警察に任せておいた方が良くも知れませんが、何かが起こってからでは対処が無いのですから……」

つまり、人為的な事を考えられてからでは遅いと読んだのである。

「へいへい分かりました。で、直紀の連絡先は？」

「……すみません。あの段ボールの中から探して下さい……」

ザツと五箱ある段ボールを指差して朔夜は笑った。それを見て、

げっそりしてしまう叶。

「いらんもんはとつと片づけてしまえ！このドアホ！」

額に怒りマークを浮き立たせながら、それでも云われた事をせつせと行う辺り叶は律儀であった。そんな中、朔夜は一箱分は手伝わっていた。告別式までには時間は十分にあるのだから。

告別式は、会館で行われた。流石に、大きな屋敷であつても十分に人数を収容するだけには止まらないからであつた。全て取り仕切つていたのは、神楽である。

昨夜より目をはらした神楽がいたたまれなくて、朔夜は目のやり場に困つてしまった。

「あちらがお父さんですか？」

官僚と云つた風体の威厳の有る身のこなしが厳格さをかもし出している。一見して陰陽師と関わり合いが有るとは思えない。一体、錦織家はどうか云つた家系なのか？

「ええ。そうです……雅樹に似ていますでしょう？私もお父様似なんですわ……」

それを決く思わないとでも言いたげに神楽は笑つた。  
「それでは、後程……」

神楽は忙しそくに次から次にやってくる弔問者の相手をしていた。気の毒にと想う。しかし、これだけが彼女の重荷にはならない。そうこれから先はもっと険しい試練が待ち受けていたのであるのだから……

告別式が終わり、火葬場へ。時間は刻々と夜へと流れて行く。今日は、携帯を肌身離さず持っている。いつ事が起こつても良いように……しかし、全てが事無く夕方の終わりを告げて行つた。

その頃叶は、病院の中をくまなく探していた。先程、自ら短い時間だとして一度トイレに入つて身を隠してしまつた後、見張っていたはずの二宮和恵の姿が無くなつたからである。

「変やなあ〜」

五階まで、看護婦が歩ける範囲をくまなく捜したはずなのに……最後には拉致があかず、ナースステーションで二宮和恵の情報を聞こうと歩いて行った。

そこでいつも看護してくれる、担当の看護師に出会い、気軽に声を掛けた。

「なあ〜二宮和恵さんおらへんの？ちょっと用事が有るんやけど〜？」

その看護師は、

「なあ〜に？お気に入りの看護師の後追っかけてるの〜？」

叶の女好きを見越して冗談まじりに返して来た。

「ひどいなあ〜そんなに女の子に不自由しとりまへん」

苦笑いの叶に、

「ちよつと待つてね。呼び出しかけてみるわ」

病院内アナウンスで呼び出しをかける。しかし、暫くしてもその場に待てども二宮和恵の姿は現れなかった。

「変ね〜今日はまだ勤務時間のハズなのに……」

と、掌を口元に持っていつて考え事をしている。そんな時、

「二宮さんなら先程見なれない男性の方と話しをしたわよ……で、ちよつと出てくるからって病院から外に出て行ったわ……」

奥に控えていたエクボが可愛らしい看護師が思い出すかのように

答えた。

叶は、しまったと頭を叩かたかのような衝撃を受けた。

「その男、黒髪で細身の女顔みたいな奴とちやうか？」

「ええ、そうよ」

朔夜の静かに怒る顔が見えて来そうで恐い。

「あ、悪いんやけど、二宮はんの持ち物何でもええんやけど貸してもらえんやるか？」

そんな叶の急いでる物云いに、

「これで良いかしら？」



近くに有る、二宮と名前が入ったボールペンを渡す。

「おおきに！悪いんやけど、これ借りるな〜それと今夜も外泊するから！よろしゅう〜」

「ちよつと！塚原さん！」

呼び止められる声も置き去りに叶は病院の外へと駆け出していった。

物にはそれを使っているその人の愛情などが込められている。いわゆる、付喪神。それを利用する事で、術を掛ける事も可能である。取り敢えず、今、二宮和恵がいる場所だけでも把握しなければならぬ。

「戻儀！」

走りながら自らの式神の琴音を呼び戻す。肩に止まった一羽の鳩は叶に差し出されたそのボールペンを飲み込むと、再び飛び去った。二宮和恵を捜す為に……

病院の外には、昼に直紀に連絡して警備にあたってもらった警察官が配備されていた。

「ここから、若い男と看護師が出て行ったやろ？どつちへ行つた！不躰に問われ、その警察官は不快な表情で叶を見た。

「いや、看護師は出て来ないが、若い男なら何人も出て来たが？」

「やられた……目くらましや！しかも堂々で行われとる。なんて奴や……チツ。と舌打ちする叶。

「俺は、城戸直紀の友人や。捜査に協力してもらおうように、話はつけとる！」

城戸と云う名前にハツと気が付いたのか、敬礼し、引き締まった顔に戻った。

「その男たちの中に、顔立ちが女みたいで、身長がこんくらいの奴おらなんだか？」

その言葉に、脇に控えていた一人の警察官が、

「それなら、そのターミナルでタクシーに乗りましたが……あんな綺麗な男もこの世にいるんだなどと想ったもので記憶に有ります」「どっちに向ったんや?」

「はっ!この道ぞいを西に!」

「分かった。サンキューな!直紀にもう警備は必要無いと塚原が云ってたと言つといててや!」

特別配置されていた警察官はその言葉で直紀に連絡をいれはじめる。叶は、その様子も見ずに慌ててタクシーを捕まえた。そして、琴音からの情報も踏まえて今、叶は走り始めた。夕日に照らされた街の中を。

「どうということなんです?」

叶からの電話に朔夜は驚きを隠せなかった。詳しくは、タクシーの中なので云えないが、二宮和恵が雅樹に連れ去られた事を聞かされた。

「分かりました。こちらもう終わりですから、これから神楽さんを連れて向います。今はまだ正確な場所は分からないんですね?」

受話器の向こうで叶が状況を話す。

「下北沢付近に向っている?……なるほど。それでは、急いでこちらに向います」

携帯を切り、朔夜は急いで神楽のもとへと駆け出した。

「神楽さん?少しよろしいでしょうか?困った事になりました……」

人の目に触れない所で、朔夜は神楽甲に事の次第を伝える。

「分かりましたわ。このままの格好で申し訳ないのですが、わたくし、今すぐ用意して参ります」

黒い着物の喪服を纏った神楽は必要な物を持ち、着いたばかりの錦織邸を朔夜と出たのである。それは、陽が暮れたそんな時刻であった。

## # 10 真実

### 真実

「神楽さんのお父さんもやはり陰陽師なのですか？」

錦織邸で呼び寄せた下北沢駅行きタクシーに乗り緊張した中、疑問として心の中に止めていた事を朔夜は神楽に問いかけた。

「ええ。でも、お父様はそんなしがらみを公に出さずに仕事に打ち込んで来られた。しかし、それは見せ掛けだけで本当はわたくし達の見えない所で力を使用していたのです。今の世を支える為に、裏では悪どい事をして来ました……その結果、官僚としてのお父様は今の地位を手に入れたのです。時代はそんな陰陽師の力を受け入れているのかも知れませんが、でも、雅樹はそれを受け入れる事を嫌がった。一度家から遠ざかっていたあの子が何故今頃になってこんな事を……」

神楽は全くその理由が分からないとも云いたげに、唇をぎゅつと噛み締めた。その唇が薄らと紅を帯びている。

「やはり、その力のせいでお母さんに負担が行ったのですか？」

「母では無く、祖母です。人柱は一代前の人物をさします。代々強く受け継がれて来た力は、一代前の犠牲で成り立っております」

「？ ……では、お母さんが亡くなった今、一代前も何も無いでは有りませんか？何故、今度は神楽さんにあたるのです？」

朔夜の頭では分からなかった。こう行っただ事は、朔夜の範疇では無い。

「異例が有るのです。人柱が亡くなった場合、その血を濃く受け継がれた者。女人を自動的に選び出すのです。だから、双児のわたくしがその任を受ける事になるのです。そのことは、雅樹も知っている事なのです」

だから、神楽を守る事が出来るかと云いたかったのか……朔夜は

あの時の雅樹の言葉をやつと理解できた。

そんな話をしながら、朔夜は叶からの電話を待っている。行き先はどこなのか？下北沢の一体どこ？

ポケットに仕舞い込んだ携帯は一向に鳴る様子も無い。ふと、神楽を見た。すると緊張感を揺るぎないものとするかのように、シツカリと目を見開いていた。そうしないと睡魔に襲われる……そう感じているのかも知れない。

朔夜は、この渋滞に巻き込まれたタクシーの中、シツカリと現状を把握しようとしていたのである。

「タクシーのおっちゃん、ここで止めてな」

叶は、料金を払い終え、路上に身を乗り出した。

琴音の気配がここからする……そう感じ取ったからである。時間的にはもう陽は沈み、月と星が光り輝いていた。

住所的には下北沢の丁度東に位置する事がわかった。近くの通りはまだ人が多い。それでも繁華街から離れた場所ではあった。番地を調べようと表示されている表示板を確認した。見覚えの有る番地。それが、二宮和恵が住んでいる場所だと気がつく事は遅くは無かった。そこで、いち早く朔夜に連絡を入れたのである。

「朔夜！分かったで……二宮和恵の住所や。はよ来い！待つとるで！」

連絡をつけた叶は、琴音の気配を頼りに路地を探して回ったのである。

「お前は、天使の啓示をどう想っている？」

雅樹は、二宮和恵の部屋で問いかけた。でも二宮和恵は返事が出来なかった。完全に自我が無かったからである。

「オレに罪を押し付け、自ら汚して無いその綺麗な手に……何を想う？」

一人暮らしのマンションは開いたカーテンのガラス越し。月の光

のみのこの部屋で、二宮和恵の身体の上に雅樹の影が落ちている。そんな中、独り言を唱えていた。

「もう少し持つてみるかい？正義のヒーローが登場する迄……」

雅樹は不適切な言素を吐いたかとも思えるように、苦笑いした。その表情を、二宮和恵は夢の中で悪魔に微笑まれているかのごとく困惑している。暗示をかけられ、云われるままにこの部屋に雅樹を上げた。そして今は現実と夢の中を彷徨っている。それは、まるで死への誘惑を掻き立てられるかのようであった……

叶は、見つけ出したマンションの部屋を全てあらっていた。二宮和恵の部屋はどこなのかを……

琴音がこのマンションにいる事は掴めた。しかし、細部迄は当てられなかった。妨害電波が阻止している。それが、雅樹特有の物であると把握するのは早かった。

「どこなんだ！」

と、階段を一つ一つ上がって行く。しかし、表札を出していないが為判らない。朔夜に連絡を入れてみるが、圏外らしく応答も無い。仕方なくマンションを一時抜け出し朔夜が到着する迄待った。その間、このマンションを取り囲むように、結界を張ろうと方位陣を引く。何かをやっておかなければ、いつ何時呪術が行われるか判からない。左腕の時計を見ながら、刻々と過ぎて行く時間を眺めながら叶はなす術なく一階の踊り場に座り込んでいたのである。

一時間後、暗い夜道に車一台分のライトが点灯して来た。朔夜と神楽を乗せたタクシーが二宮和恵の住所に辿り着いたいたのである。

一階の踊り場に座り込んでいる叶を発見した朔夜は、

「どっしたんです？叶？」

気分が優れないのかと心配して問いかけたが、

「部屋が分からなかったんや！」

の一言で安堵の溜め息を漏らした。

「505ですよ」

朔夜は、神楽と叶を引き連れてその部屋へと向った。しかし、五階にあるはずの部屋は存在していなかった。また目隠しをされている。

「これは……雅樹の特技なんですよ……少し離れていて下さい」

神楽は、落ち着いて504と506の間に存在しているであろう壁の前に行くと、印を結んだ。

「幻視、開眼！」

そうすると、歪んだ空間がユラユラと明かりを巻き込みそして、一つの扉が浮かび上がって来た。

「在った……あんた凄い技やな、俺にも教えてや！」

叶は、興味を覚えたのか、飛び上がって喜んでいた。しかし、

「これは、錦織家特有の術ですよ。塚原さんには無理ですよ……」

静かに否定の言葉を返す。そして、その扉の中に入ろうとノブに手を掛ける。それは不用心にも鍵があいていた。中は真っ暗で、人の気配を感じ取る事が出朱ない。いないのでは無かるうかとさえ思う。しかし、

「雅樹はいます」

神楽のその言葉に、朔夜達は誘われるかのように入って行った。

「ようこそ、天使の園へ……」

3DKの一番奥の部屋に、雅樹はいた。居たと言うには何かが変である。それが何かは具体的には云えないが……

「久しぶりだね、神楽姉さん……もう何年になるかな？」

「……一年よ」

「そんなもの？オレにはもっと長く感じられるよ。しかし、シナリオが一部変更されたな……まさか神楽姉さんがやってくるとは思って無かったよ……」

やはり、シナリオをはじめから書きおこされた物だと自覚したとたん、朔夜の背筋に冷たい汗が流れ落ちた。

「わたくしが来ないと思っっているようでしたら、甘いわ……そうでしたわ、今朝お母さまは亡くなったわ……あなたは何を考えでいるの！」

はた目から見ていると、まるで姉弟喧嘩でもしているかのようである。

「くたばったか……それで、業を煮やしてやって来たんだ？姉さんは！」

カーテンがフワフワと揺れている。逆光の中の雅樹の表情は全く読み取れない。

「何故なの？あんなに陰陽師の事を疎んでいたのに……」

「疎んでいると、一つ分かった事が有るんだ。聞きたい？」

「……」

言葉を詰まらせていた神楽は頭を垂らした。それを合図に、雅樹は自らの足下に転がっている二宮神楽を抱え上げ、窓際へと後ろ足で歩を進めた。

「現実を受け止める事もできないオレにはこれが一番だって事が分かったんだよ！」

「やめてー！ー！」

雅樹が印を結び呪文を唱えると、突然神楽が発する絶叫が、辺りに響いた。その瞬間、神楽は心を抜かれたかのように失神した。

「神楽さん！」

神楽を受け止めた朔夜は床に静かに横にした。

「あはははは！これで、勝機はオレのもんだ！」

突如、カーテンの間から斬り付けられるような風が舞い込んで来た。その風は下から一気に伸びて来た樹木の風圧で、その樹木の枝がスルスルと伸び雅樹を包み込むと身体は宙に浮きあがった。

「なんや！これ！……」

叶は、今何が起こっているのか分からないとでも云いたげに朔夜の影から身を乗り出した。

「オレは五行五元素の内、特になんか抜けて水を操る陰陽師。そして

一般的に出回っている陰陽師とはケタが違う！そして、神楽をも手に入れた！完全無欠だ！賭けはオレの勝ちだ！残念だったな〜」

そう云うと、念を送り、樹木に包まれたままカーテンの外に飛び出した。それを追って窓際へと朔夜と叶は駆け出した。

「ほう……で、この地上に二宮和恵さんを突き落とすと云うシナリオですか？残念ですね。あなたとの賭けは成り立ちません。以前云いましたよね？一人で何でもできると思っている方が驕っているのではないのかと！」

突然……マンションの下からパツと照らし出す光で雅樹の身体は浮き立った。

「警察か……」

下から浴びせるように光を灯している警察官の群れ。その中に直紀の姿を見つけた。

「直紀間に合うたんかい……」

叶は、へたり込みそうになった身体を押し殺して、二宮和恵の部屋から騒げ出して行った。

「おい！あの男、異様に伸びた木に巻きつけられて宙に浮いてるぞ！しかもこの木、動いてる！」

外の警察官は、このあり得ない現象に目を見張っていた。そして、急いでその部屋の下にマットを敷く用意が始まった。

「小賢しい真似を……」

そう呟くと、雅樹はより高みへと樹木を伸ばし身体を浮かせて行った。それを目で追う朔夜は、部屋を出て、マンションの屋上へと急いだ。倒れたままの神楽をそのままに……

このマンションは、十階建てのかなり新しい物であった。エレベーターを使い一気に屋上へと向う。

外の空気は雅樹に有利に働いている。それを感じてると朔夜にも分かった。

「二宮和恵さんを返して下さい……今ならまだ間に合います……」



流石にマットを引いたとしても、この高さから落ちると無事には済まない。

「これ以上続けて、雅樹君には何が残ると云うのですか？神楽さんを守る為に何故止まらないんです。あなたが持ちかけた賭けに何故そこ迄神楽さんを巻き込むのです！本当は守りたいのでしょうか？」

朔夜は、マンションの屋上のへりに足を掛けた。

「神楽、神楽と云うな！お前は何も知らない癖に！」

「知る訳ないでしょう！君と僕とでは一緒にいる時間の長さが違うのですから！」

そこで大きな枝伸びてきて朔夜の首を締め付けた。

「グツ……」

苦しくてもがく中、

「神楽の意識界とオレの意識界は繋がってるんだ！あいつが就寝すると、全部オレの中に流れ込んでくる感情の嵐。それは、オレの力を増幅させ、今ではこの通り……死への甘美を味あわせてくれる……あいつさえいなければ、何も問題なんて無いんだ！平気で眠りに陥る姉さんは、オレの事なんて考えて無いんだ！」

より一層きつく締め上げられる木の縄は、朔夜の意識を遠のかせて行く。

「莫迦な……事を……」

うめき声をあげる中で朔夜は思考を取り戻そうと必死だった。

このままで死ぬ訳には行かない……叶！

そう心で念じた時、木の縄は弛んだのである。

その頃の叶は、結界の内に有るこのマンションに術を行った。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前！」

吹き上げる風が雨雲を呼んだ。そして、雷鳴が轟いて来たのである。

突如の雨に周りの警官達が、咄嗟に頭を手で覆っていた。

「俺ができるんはこのくらいや……朔夜待つとれ！今戻る！」

一気にマンション周りに上昇気流のマットを敷き詰める術をも施し、直紀に一礼すると叶は505室へと向った。

「こんな術が使えるのか……意外にお前付の陰陽師もやるじゃん？しかし、雨はオレに味方してくれるんだぞ……すなわちそれを相生と云う」

雷雨の中、雅樹は樹木を上手く操りながら雅樹は云う。

「しかし、今この手を摩したとしても地上の風のマットが守ってくれると云う訳か……よかろう、その心根だけでも組んで、この供物を手放そうか……」

そう云うと、スツと腕を下ろした。その為に二宮和恵の身体は地上へとまっ逆さまに落ちて行った。それを見守る雅樹。しかし下降して行くその身体は、何故か途中でガクンと止まった。

それは505室の部屋の前であった。

「何！」

気絶していたハズの神楽が無理矢理意識を取り戻し、窓際で二宮和恵の身体を両腕で掴んでいたのである。

そこに駆け込んで来た叶が自由の効く左腕で神楽と二宮和恵を部屋へと引き込んだ。

「無理するんやから……まったくこのお嬢さんは……」

自分の事を棚に上げてそんな事を云うと、叶は窓際から朔夜にニマリと笑ってOKサインを出す。ホツと一息つく朔夜。それに気が付いた雅樹は、急に取り乱した。樹木を上手く操れなくなったのである。

「神楽姉さん……」

表情が先程と異なる。

頭を抱え、うめき声をあげると、雅樹を包み込んでいた枝の力が弱まりふつと地上に落下しそうになった。それに気がつき、朔夜はその雅樹の手を取り上げた。下は上昇気流のマットが有ると云っても、やはり落ちて行く人を助けずにはいられなかった。

「なぜ……」

雅樹の身体の重みが、朔夜の右腕に掛かる。ギシギシと骨が軋む。これが命の重み。こんなに重いと自らも落ちてしまいたい。しかも、この天候で、濡れた肌が滑りやすい。

そこに、叶と神楽が現れ、三人掛かりで雅樹を屋上に引きずり上げたのである。

引きずりあげられた雅樹は、

「何故助けるような真似をする！オレはお前などに助けられる謂れなど無い！」

怒りに震えた雅樹を見下ろしていた三人であつたが、その次の舜悶『パシーン』と、その横つ面を渾身の力を振り絞つて神楽が叩いていた。

「何云っているの！こんな風に身を呈して助けてくれるなんて人、他にいやしないわよ！何寝云っているの！自分だけが不幸だなんて思わないでちょうだい！」

神楽の怒つた顔なんて初めて見たとでもいう風に雅樹は驚きの表情で見上げていた。その周りは雷を轟かせる雨が叩き付けていた。もう四人ともずぶ濡れである。

「わたくしは……雅樹の抱えている辛さなんて分からないわよ！わたくしの感情が、意識が……あなただけに注がれている事を……毎夜魔されていたあなたの事を聞かされた時は辛かつたわよ。でもわたくしだって、いつ術を使われお母さまのように命を落とす事になるか気が気では無かつたわ！この気持ち、雅樹、あなたには分からないでしょう？だから初めからこんな力に頼らずに、生きようつて……決めたじゃ無い……もう忘れ……」

そこで、神楽は崩れるよう意識を失つた。全てを吐き捨てて迄云いたかつた事はもう言葉として出では来なかつた。降り続ける雨が神楽の熱を奪い取つて行つたかのように……その様子を見ていた朔夜は駆け寄つた。

「ふはははは……云いたい事はそれだけか？どこまでも甘いんだよ。姉さんは！」

再び樹木を呼び起こした雅樹は宙に舞った。また、一段と人格が変わってしまったかのようで……雅樹今度はドンドンと空高くその樹水の蔓を伸ばして行った。

「賭けは引き分けと云う事にしておきましょうか？都往朔夜！次逢うのはいつになるかわからないが、お前がキヨウと関係が有る限りは、またいずれ何処かで逢うだろうよ！勿論、敵としてな！既に別件で運命の輪は回り始めている……」

意味の分からない捨て台詞を吐きながら、暗雲立ち籠める空の彼方へと雅樹は去って行ったのである。

## #11 エピローグ

### エピローグ

賭けは、雅樹が云った通り引き分けになり、その後、下北沢近辺での事件は起こらなくなった。そして、今迄存在していた、裏ホムページも消えてしまっている。捜査の手が回る前には、今回の一件は闇に葬られたのである。

あの後、神楽を抱え二宮和恵の部屋に戻った朔夜は、直紀の指揮の下、二宮和恵の自我を取り戻す為の夢交換を終え無事意識を取り戻した。

しかし、肝心の神楽の熱は三日間続いた。術を操った雅樹の為人柱のせいなのか、過労気味だった上に雨に打たれたからなのだろうか、その辺りは全く分からなかった。原因不明の昏睡状態である。そして、熱の山を充分越えた今になっても神楽が目覚めることは決して無かった。

しかし、神楽の身は父の酷慮で、秋元総合病院に今は入院と云う形で生き長らえている。

その事で、朔夜は叶に頼んで、病室に呪阻返しを行う為に結界を張ってもらった。これで、もし雅樹が術を行っても人柱としての神楽の身に害は及ばないであろう。逆に、術者にその反動が返される事となり、無闇な術は行えないであろうと気休めながら安心している。それからと云うもの、朔夜は叶の再入院の手続きを終えてからというものの欠かさず叶の見舞いの合間に時々神楽の顔を見に行っていた。

その神楽の意識は、心の闇の奥底に在り、殻を被ったまま表に出て来ようとしなない。朔夜の力よっての占夢も効果は全く無かった。そう、自我を取り戻す為の努力も虚しいものであった。

ただ、今回の件で分かった事は、神楽が眠った状態になると、雅

樹の力が増し、人格さえ変わってしまうと云う事だった。この双児の力は想像するには難し過ぎて、朔夜も叶も、さじを投げるしか無かった。

昏睡状態の神楽が次いつ目覚めるのか……雑樹との賭けが終わった今でも気にかかる。今の現状だと、この地上の何処かで呪組返しを施しているのも知らずに雅樹が大きな事件を起していても不思議では無い。いや、もしかすると、神楽に掛けた呪組返しの事に勘付いているかも知れない。そして、敢えて何処かに潜伏して来るべき時を見計らっているかも知れない。全く油断はならないのである。

そしてあの日の事は、マスコミ関係には報じてはいない。警察官もあの現状を理論上あり得ないと判断していた為である。テレビの中の超常現象と目されての番組の「コマのようだとしか把握していない。その中で直紀と叶は、この事実を知る第三者であり、最近によく朔夜や叶の前に姿を現すようになってはいるが深入りしないようにしている。知ったところどころでどうにかなるかと思われ、全く持つでどうにも動かす事は出来ない。蛇の道は蛇。そう考える事にしたらしい。

「叶？神楽さんはいつ目覚めるのでしょうか？」

それが、今では合言葉になっている。

「さあなあ、神のみぞ知るってやっとなっちゃうか？」

叶も、一ヶ月を過ぎる今では完全に骨が引っ付き、リハビリの最中である。そんな叶に、かえでがしょっちゅうやって来て、『映画』と唸っているらしい。誕生日プレゼントの映画の最終日が近くなっているのである。

「眠り姫を起すのは、昔から王子様って相場が決まっとる。試してみてもどうや？」

「冗談交えに叶はそんな事を云ってみせる。それが朔夜へのいたわりだと分かるから朔夜は笑ってみせた。」

「そう出来る資格は僕には有りませんよ……」

夢を見ないと云う問題を抱える叶の事。今回引き分けだと云う言葉と、叶に関係有るらしい意味ありげな言葉を置き土産に残して去って行った雅樹が、これから先に起すかも知れない厄介な事。山積みになされていくこれらの問題。それらを考えると今の自分をもっと揺るぎないモノにしなければならぬとそう思う。

そしていつの日か、神楽自身が起きあがれる事を願いながら朔廠は今を生きている……

## #11 エピローグ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

まだ、これから参の巻をUPしていく事になりますが、お付き合い頂けると大変嬉しいです。

感謝の言葉で一杯。ありがとうございます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6477d/>

---

占夢者人の夢～弐ノ巻・後編～

2010年10月8日15時56分発行